

# ひきこもりの社会的背景と地域社会への貢献

## 【目次】

はじめに

第一章 急増する「ひきこもる」若者たち

第1節 「ひきこもり」とは

第2節 「ひきこもり」に陥る社会的背景

第二章 「ひきこもり」の現状とその課題

第1節 ひきこもる学生の現状

第2節 自分探しにつまずく若者たち

第三章 地域社会への復帰を目指して

第1節 ひきこもりから脱出するために

第2節 ひきこもりが社会復帰するために何が必要か

おわりに

## 【目的】

今日、大学に進学する学生が50パーセントを上回るようになって来た。それに伴い、ひきこもりの若者の数も年々増加傾向を見せる。昔に比べ、目的意識のない若者が多くなって来たために、大学にいる意義を見出せなくなり、ひきこもりに陥る人が増えたと考えられるが、このままでは日本経済は毎年学生の四分の一の労働力を無駄にしていることになる。この状況を打破すべく、「ひきこもり」の心理を踏まえながら考察していくことを目的とする。

## 【方法】

参考文献を利用して、教育心理学・臨床心理学の観点からひきこもりの心理を追究し、その背景にある自立社会のあり方を考察する。

## 【結論】

「自立」は、主体性を重視、自己決定と自己責任の重さを強調する。今、日本は政治・経済そして教育とあらゆる分野で、この言葉が津波のように大きく押し寄せてきている。そして、それが可能な組織や人間のみが安心して生きることのできる社会になりつつあることも事実である。

強いものだけが生き残ることができるという発想のもとで、痛みであるとかひきこもりがいち早く現れたのが、若者の「ひきこもり」であるといっても過言ではない。「自己決定=自立」の回避願望が作る世界こそ、「ひきこもり」に他ならない。

そうした観点から、教育相談所や適応指導教室、各種のフリースクール、児童相談所、保健所、そして大学の学生相談室などが連携するシステムであるとか、対処組織・機関を作ることが必要であり、ひいては「ひきこもり」の原因や理由を明確にでき、対応方策を示すことのできる臨床家、つまり「見たて」がきちんとできる専門家を養成することが必要であるという結論に至る。

## 【参考文献】

速水敏彦・吉田俊和・伊藤康児編 『生きる力をつける教育心理学』 ナカニシヤ出版 2001年

高塚雄介著 『ひきこもる心理 とじこもる理由』 自立社会の落とし穴 学陽書房 2002年

木村忠雄編著 『教育心理学のエッセンス』 八千代出版 2001年

宮原英種・宮原和子著 『人間環境論』 ナカニシヤ出版 2006年

F.J.メッドウェイ・T.P.キャファティ編 『学校心理学』 北大路書房 2005年